

## 四

世界の了解と世界内存在としての自己の了解とは同時的というよりもむしろ同じことなのであろう。かかる了解即ち私の身体を通しての(身を以っての)了解とは勿論前述定の知なのあるが、その知とは一体感覚なのか、直観なのであるか、それとも知覚なのであろうか。メルローポンティによればそれは根源的感覚であるが、フッサールの根源的印象や心理学的体感と混同しないためには、ここに於けるその知を根源的知覚と名付けられるべきではないだろうか。諸氏の御批判を給われれば幸甚に存じます。

以上

尚、本講演についての詳細は後日、大谷学報誌上で論文の形式にて発表の予定であります。

## 湖北神照寺の中世資料

本学専任講師

佐々木孝正

中世において地方寺院が、宗教的にいかようなありかたをしていたかを具体的にあらわかにすることは、わが国中世仏教史研究における課題の一つであらう。すなわち、地方寺院の宗教的な活動が、武士、農民、あるいは商人といった在地住民との交流を通じて解明される必要があるのである。地方寺院を構成する住侶の

性格、そこでおこなわれる年中行事や各種法会の内容とその宗教的目的、およびそれらへの住民参加のありようが検討されねばならないのである。

特定の豪族や支配者によって建立され、彼等の盛衰と運命をもにする菩提寺のほか、中世には山岳霊場や霊場信仰に支えられた庶民的寺院が、納骨や先祖供養を通じて、庶民の宗教的要求にこたえていた。また村落にも寺庵や村堂のごとき小規模な宗教的施設があつて、村落共同体の生活と密着したかたちで、その精神的紐帯の一として機能していたことは周知のところである。これらのほか社領莊園等に存在し、多数の塔頭を擁して一山を構成する顕密諸宗の寺院等も多いのであるが、これらについても、その宗教的な活動が地域住民との関係においてあらわかにされていかねばならないのである。湖北の神照寺はこのような寺院の一と考えられるが、そこに所蔵される若干の中世資料をとりあげ、室町時代における地方寺院の庶民寺院的な側面を少しく考えてみることにしたい。

神照寺は日出山と号し、明治二十七年以降新義真言宗智山派智積院末の真言宗寺院として現在に至っているが、寺伝によれば寛平二年宇多法皇の御願として、本覚大師益信により開創せられたとみられる。文龜年間に山城醍醐寺報恩院末となり、江戸時代には、金胎両部の大日如来を安置する本堂を中心に、学頭無量寿院をはじめ、一山二十余坊で構成される百五十石の朱印寺であった。

中世の神照寺については、その寺歴はあまり詳らかではなく、

山城醍醐寺のほか、比叡山延暦寺、紀州根来寺等との交流のあったことが知られ、記録文献として、応永十七年二月五日におこなわれた神照寺本堂造立供養法会の次第を記した神照寺本堂供養記録、同じくその法会に要した費用、物品、勸進奉加の記録等を記した神照寺本堂上棟記録、それにほぼ同時代の神照寺寺領の目録等が残されている。

右の資料によれば、神照寺は貞治年中、住僧菩提坊隆信を中心に、旧損した伽藍の再建をおこなったことが知られ、完成後堂供養を遂げる前に天災により焼失したので、応安年中再び隆信を中心に一寺の衆徒同心合力して再興し、その後三十余年を経た応永十七年に至り堂供養をとげるに至った次第がうかがえる。

これらの記録でまず第一に注目されるのは、室町時代の神照寺一山を構成する住侶の種類である。すなわち神照寺は応永年間院主明願院賢秀、学頭如意坊といった学侶をはじめとする正規の僧侶のほかには山伏と聖が存在していた。寺領の目録に行者堂の上葺田について、「衆徒山伏中ヨリ出一段」云々とあり、役行者をまつる行者堂を中心に、それを管理する山伏修験の徒が存在していたのであった。長浜市八幡神社に所蔵される室町時代の奉加合力分記録にも「余所江合力分」として、「行者堂之立時 一貫文 神照寺」とあり、年時は詳らかでないが、神照寺の行者堂建立にあたり、神照寺衆徒山伏の資縁勸募に応じて一貫文の合力をしたことが知られる。この山伏の数がいかほどであったかは不明であるが、嘉吉元年の興福寺官務牒疏に、神照寺について「僧房二十一宇 衆徒三十八口 承仕下僧五十人」とあるのは、およその

数を推測する手懸を与えてくれよう。神照寺に現在も熊野神社が祀られ、これが一山の惣鎮守であると伝承されているのは、この山伏がいかなる系統のものであったかを推測させるものとして興味深い。江戸時代に、伊吹山の南麓に所在する上平寺が神照寺末寺となっていることも注意される。上平寺は太平寺、長尾寺、弥高寺、観音寺、松尾寺などともに伊吹修験を構成した山麓の修験寺の一であり、延享三年、神照寺年預文殊院より円福寺役者にあてた書上げによれば、上平寺は飛行上人の開基と伝え、学頭無量寿院の末寺であった。中世の神照寺山伏の多くが、熊野とも交流のあった伊吹修験の徒によって占められていたことを推測させるのである。

また神照寺本堂供養記録によれば、供養会に左方舞として、蘇合香、抜頭、陵王、右方舞として退宿徳、納曾利の舞樂が演ぜられたが、この舞人十二名は神照寺一山寺院の稚児たちであった。また笙、箏、鉦鼓等を担当した十五名の伶人も、そのほとんどが一山の住侶であり、なかに「筑後公朝乗」「一乗坊讚岐公道阿」のごとく国名を称する山伏的な住侶の存在することも注目される。このように一山の住侶たちにより、稚児舞としての舞樂がおこなわれているのは、中世の神照寺に修験の徒を中心とする延年芸能の存在したことを物語るものであろう。神照寺近辺の寺院においても、伊吹修験の観音寺においては四月鎮守の祭礼に「大衆舞」のおこなわれたことが、永禄六年の巨細帳にみえており、湖中の観音霊場竹生島宝殿寺も、中世には山伏修験の徒が存在したが、江戸時代には毎年六月十五日の蓮華会に稚児による舞

楽が奉納されていたのである。神照寺舞楽は江戸時代にはいつて衰滅したらしく、今日わずかに雅楽のみが村人により伝承されている。

次に神照寺の聖(ひじり)についてみると、室町時代寺領の目録に聖の着衣につき寺僧と區別して、「諸聖直綴不可着事」とのべられている。この諸聖がいかような種類の聖をさすかあきらかでないが、同じく寺僧、山伏、聖によって一山を構成した、伊吹山観音寺に例を求めると、永禄六年の巨細帳に、聖米の分配を記して、本堂聖、如法経聖、法華三昧聖、鎮守聖、大鼓聖、法輪聖の六種の聖がみえている。神照寺に於いてもほぼ同様の聖が存在していたと推察される。聖は、寺院年中行事や法会の準備と執行に、あるいは諸堂の管理、寺院の雑役等に、下級僧として承仕とともに重要な役割をはたす存在であるが、興福寺官務牒疏にみえる神照寺の「承仕下僧五十人」はその数を推測せしめるものである。観音寺文書応永十二年の本堂造作次第によれば、本堂、行者堂、不動堂のほか阿弥陀堂が存在したが、永禄六年の巨細帳によれば七月の行事として、堂聖による四十八卷の阿弥陀経読誦がなされている。神照寺においても寺領目録に、「七月十五日ニ念仏堂ニテ加十四日夜為実印阿弥陀経六卷可有齋誦」とあり、念仏堂があつて死者追善の阿弥陀経読誦がおこなわれていた。おそらく観音寺の場合と同じく念仏堂に勤仕する聖の役であつたのではなからうか。また神照寺では死者の忌日に「実泉忌日七月十二日、廿五三昧勤行可預御訪」(寺領目録)等と、追善のための廿五三昧会がさかんにおこなわれ、その忌日田が「左京公念仏堂廿五三昧

田 壹段」云々(寺領目録)とあるように念仏堂に寄進せられていた。観音寺文書永禄五年の阿弥陀経読誦衆帳並置目によれば、観音寺では十三人の講衆により、毎月十日に廿五三昧会が修され過去帳記入による永代回向がおこなわれていたが、神照寺においても同様なかたちで念仏堂を中心に死者の追善供養がおこなわれ、地域住民の宗教的要求に応じていたものであろう。

さて、今一つ神照寺の庶民寺院的性格を示すものとして勸進の活動に注意したい。すでに神照寺行者堂の建立が勸進によるものであることは先にふれたが、応永十七年の本堂造立供養に至る応永年中の本堂再興事業は、その資縁を広く衆庶を勸進することによって得たものであつた。神照寺本堂供養記録に、「就而寺中無力故、且為一仏浄土来縁、奨近山万徒奉加、致近里貴賤之勸進」とあり、近辺の寺院住侶をはじめ地域住民の奉加に依存したことが知られるのである。また神照寺本堂上棟記録には、応永十七年の本堂供養会においても、奉加錢二貫五百五十文のほか、米、豆腐、布などの奉加物の寄せられたことを記録している。死者の追善供養や現世利益的な祈禱など、支配者、庶民を問わず地域住民の宗教的要求を充足せしめる宗教活動のあつたがゆえに、住民による経済的支持を獲得することができたと考えられるのである。神照寺における勸進活動の存在は、そのまま地域住民との宗教的交流の広くおこなわれていたことを示すものであると云えよう。ところで、このような勸進をおこなう神照寺の勸進者について、寛正五年の年紀を有する十六羅漢像裏書には「勸進本願高藏坊濟運」と、本願を自称する住僧の勸進がみえている。本願につ

いてはさらに神照寺本堂上棟記録に、供養会における引馬を記して、院主明願院、学頭如意坊をはじめ一山寺院を記すなかに、「本願寺」がみえている。周知のごとく、室町時代において、本願と称される專業の勸進聖が、寺社に隸属してさかんに活動したことは、金石文等にうかがいうるところである。興福寺官務牒疏には、坂田郡富永庄に行基菩薩開基と伝える本願寺のあったことを記しており、坂田郡米原町上多良に現存する薬師堂は、徳川家康勸進免許の書状を以て、毎年近畿北陸の勸進を許されたと伝えられたが、近江国輿地誌略によれば、本願寺とよばれた遺跡の一部であった。神照寺においてもこのような本願の住む寺が、神照寺の勸進経済と深いかわりを持って存在していたことが推測せられるのである。

以上のべたように、一山住侶の構成に認められる山伏、聖の存在、延年の一部かと考えられる舞楽の存在、死者の追善を媒介とする土地の寄進や念仏堂における二五三昧会の実修、あるいは勸進活動などに、地方寺院としての神照寺の庶民寺院的側面を認めることができる。それは又、葬祭を中心とした仏教大衆化のおしすすめられる室町時代における仏教界の動向と軌を一にするものであると云いうるのである。

## ゲーテ美学における特殊と象徴

本学専任講師 友田孝興

芸術と科学、これは丁度、呼吸と吸気、心臓の収縮と拡張といった極性作用と同様に、ゲーテにあっては、絶えることのない永遠の相補的連関運動を繰り返しながら、生きた実り豊かな真理の把握へと昂進している。

彼の科学的認識の目標は、自然と人間との内に顕現する生命の「根源現象」を、直観によって律動的に捉えることにある。真理の認識に際しては、「経験的現象」を如実に観察し、それを悟性による多数事実の持つ共通属性の抽象化によって、いわゆる「科学的現象」にまで高めることが不可欠であるが、しかしそれと同時に、経験の内には見出されることのない、例えば「物体の自由落下」というような純粹事例を構想することが特に重要である。

つまり、経験的概念に加えて、「純粹現象」(根源現象)という純粹理念の構想が必要なのである。そして最後に再び、この純粹理念を現実の場において直観確証して行かなければならない。ゲーテの根源現象とは、主観と客観との啐啄同時において直観に啓示されるところの、このような理念と経験との合一としての「根本真理」を意味する。

ところでこの純粹理念の構想とその確証を司る直観を得るため